



TITLE:

學者とアマチュア : 卷頭言

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 學者とアマチュア : 卷頭言. 天界 1934, 15(165): 81-82

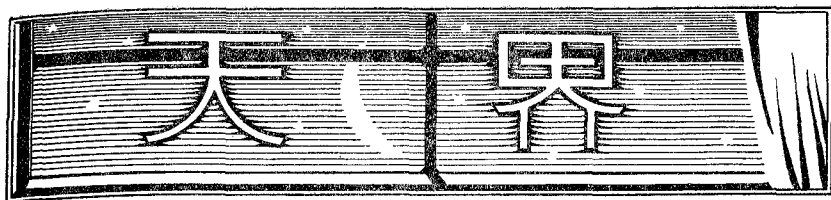
ISSUE DATE:

1934-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166948>

RIGHT:



第百六十五號 (第十五卷)

(昭和十年) 一 月 號

學者とアマチュア

(卷 頭 言)

何れの學術にも、今は専門的學者とアマチュアとがあるものであるが、殊に我が天文學界に於いては、學者とアマチュアとが複雑に共存共榮してゐる事實が著しく見られる。ところが、總ての人が此うした學者とアマチュアとの別を一種の階級別のやうに見る傾きがあつて、學者たる人々を相當以上に尊敬し、アマチュアを單なる「物好き」以外の何者でもないと認める人が多いが、之は、大なる誤りである。吾人をして言はしむれば、所謂「學者」は、學界の權威者であると共に、多くは或る一二の題目について深い造詣を持ち、其の蘊奥を極めてゐるが、同時に、他の一面に於いて、學者は、其の視野が甚だ狭く、其の性格さへ稍もすれば偏狹で、單に「馬車馬」的の見かたに陥り易く、人間として、殊に一個の社會人としては非常識な場合が多い。是等は正に人間としての缺點であると同時に、學術の進歩のためにも亦此れは大なる通弊であるといはねばならぬ。此の弊あるがために、古來、學術が邪道に陥り、行きづまりとなり、問題の主従を轉倒し、ひいて人世のために妨げとなつた例が、東西共に少くない——之に反し、アマチュアは、大體に於いて趣味の人であるから、學の内外に於いて、常に情味と餘裕のある生活を楽しみ、研究上の因襲に囚はれず、自由を享樂し、常に新と奇とを求めて、飽きず、いつも、人生のひろい立場から學術を見るために、偏頗がない、たとひ其の楽しむ學術に充分な深みは無くとも、「人生のための學術」を正しく見、又、「學術の實した眞理」を人生に生かすことに於いて誤らず、即ち、學術の「人

生に對する「價值を直接に評價し享受する特權を持つ場合が多い——こう考へて見ると、狭い「學術界」のためには、専門家は大切な人であるが、廣い「人世」の文化發展のためにはアマチュアこそ誠に貴重なる存在と言はねばならない。

専門家の功績は世に認め過ぎるほど認めてゐるから、こゝには言はない。むしろ今吾人は、忘れられ勝ちなアマチュア天文家の偉大な貢獻を顧みんに、大昔し、天への詩と讃歌にひたりつゝ「星座」を發見した人々、「地球」を確認した人々、天文航海術を開拓した人々、乃至は、太陽中心宇宙を發見した人々、望遠鏡の發明者と、天への應用者星圖や星名の作者、新遊星の發見者たち、太陽黒點の觀察者、各種の反射鏡の考案者、二重星變星星霧星團などの探索者、天體スペクトル學の開拓者、寫眞術應用の先覺者、月面や遊星面の觀察者、變星光輝の追従者、彗星や流星の發見觀察等に勵む人々、………其他、誠に限りなき此等の人々は、殆んど皆わがアマチュアに屬する人々ではないか。只、所謂「専門家」は、只、黙々と此等アマチュアが開いた道を、深く掘り下けて行く技術者に過ぎないやうにも見える。

自分は、天文學上に於いて、所謂アマチュアと専門家との階級別を認めない。學の進歩は此の二方面からの協力あつてこそ健全に實現するのである。若し、専門家ばかりで、アマチュアがなければ學界は沈滞し、又若しアマチュアのみ跋扈して専門家が無視されれば學界は上迂りのした單なるクラブと化するであらう。

自分が世の専門家に願ふ所は、天文學のためにアタラ一生を棒に振つて單なる技術者になるよりは、むしろ天文學的教養を経て、明るく正しき一個の「人間性」に還元せんことである。——天文を通じ、數理を通じ、物理や化學を通じ、又は一般に生物や自然學を通じて教養の弘く且つ高い人士を世に獲ることは、哲學や宗教や藝術やスポーツ等を通じて高尚な教養ある人士を獲ると同様、我が人生に價值多きことであるが、此等の點に於いて我國は未だ歐米諸國に比して多少の後れを感じる。

敢へて我が學界の内外に訴へる所以である。（山本）